

〈第十八回銀華文学賞応募作品 佳作〉

稔り雪

青木ガリアン

一

山の深緑を背に、金色の稲穂が広がっていた。

年貢を取りまとめる沙汰人と村の長である乙名が、同じ畔に立ち、米の出来を検分していた。一昔前なら考えられぬ光景であった。

都での大乱以降、百姓は一揆による多くの屍を大地に積み重ねたが、それは同時に村の自治を生み、年貢の納入を村で請負う新たな道を切り開いた。

山の麓に広がるこの集落も、数年前より沙汰人が領主の間に入ることで、村として自ら年貢を納めるようになっていた。

「出来は良さそうだな」

沙汰人は、頭の垂れた稲穂に手を添え、実入りを確かめていた。

手間はかかるが、一間四方の坪刈りをして、粃の量を量れば、およその収量はわかる。

「夕刻にはまだ間はある。試しに刈ってみ」

乙名は、後ろに控えていた若衆の佐吉と与助に試し刈りを命じた。

佐吉は背から鎌を抜き、乾いた田に歩み入った。与助も後に続き、田を前にして、小袖の襟を引き締めた。

佐吉が腰を折り、稲株に手を回す。株は手に余るほど張りがあった。

「あっ」

その瞬間、佐吉は声にならぬ呻きを上げ、鎌を引く手を止めた。

目の前に、稲株の間から一匹の白い^{かげろう}蜻蛉が浮かび上がった。蜻蛉は稲穂の上で羽をゆつくりと動かし、澄み渡る青い空に向かい、ゆらゆらと立ち昇った。

佐吉と与助は声を失い、蜻蛉の行方を目で追った。沙汰人と乙名もまた、蜻蛉が立ち昇る空を見上げた。時は静かに流れた。

蜻蛉は秋を迎える頃、夕刻より一斉にわき立つ。一匹現れたとなると、夜には先が見通せぬほどの数となり、空を白く覆う。ただ、それも一夜限り、短い命を終えた蜻蛉は、朝には骸となり地に降り積もる。

蜻蛉の姿は空高く消え、陽は傾き始めていた。

「刈らずともよい。およそ出来はわかる」

沈黙を破ったのは沙汰人だった。

その声に、佐吉と与助の二人が振り返ると、乙名も横で頷いていた。

「まだ見て回らねばならぬ他の集落もある」

沙汰人の足はすでに動き出していた。

馬は馬小屋の前につながれていた。

沙汰人は馬の繩をはずしながら、小屋を念入りに覗き見していた。中には佐吉と与助が育てた若馬アオが草を食み、その頭上の屋根裏には山ほどの藁が積まれていた。

「年貢は変わらぬと考えてよいのだな」

ようやく追いついた乙名が、馬の鞍に手をかける沙汰人に聞いた。

村請けの年貢高は定量にて、前の年もその前の年も不作ながら、割合として重い年貢を納めている。ならば、出来が良い年も同じでなければならぬ。佐吉と与助も乙名の言いたいことはわかっていた。

「まだ決まってはおらぬ」

沙汰人は鎧にかけた足に力を入れ、馬に勢いよく跨った。

「今年同じなら、一息つけるのじゃが」

乙名は、尚も馬上の沙汰人に話しかけた。

手綱を操る沙汰人は、馬の鼻先を返すと、かぶっていた笠を上へ傾けた。その横顔には、戦の古傷か、一筋の刀傷が深く刻まれていた。

「年貢高は追って知らせる」

沙汰人はそれだけ言い置くと、手綱を大きく波打たせ、山に向かい走り去って行った。

蹄の音が消えるのを待ち、村人たちがどこからともなく乙名のもとに集まってきた。

「何かあったのか？」

「年貢が増えるのか？」

村人は沙汰人が慌てて去ったことよりも、乙名の厳しい顔つきが気になっていた。

「蜚蜮が立ったのだ」

佐吉が後ろから声を上げた。

「まことか？」

「今宵、蜚蜮が空を埋め尽くすのか？」

村人はざわついていた。

「まことだ」

答えたのは与助。佐吉と与助が同じことを言うのであれば確かに違いない。村人は一気

に静まり、乙名と同じ顔つきとなった。

「盗賊がやってくる」

乙名がようやく重い口を開いた。

盗賊は収穫後の村を襲うのが常道。しかし、そこにはまだ納めてはおらぬ年貢分も含まれる。年貢に手をつけたとなれば、天下の大罪、領主を敵に回すことになる。そこから、ここ数年、稲刈り前を狙う新手の盗賊が現れた。収穫前に米は底をつく。しかし、百姓は必ず隠している。隠した米なら、訴えることはできぬ。何より収穫は近い、命がけの抵抗もせず、泣き寝入りとなる。百姓を知り尽くした盗賊と言えた。

その盗賊が、空を覆う蜉蝣に隠れて忍び寄ってくるのではないかと言い出したのは佐吉だった。確かに、皆の記憶でも、襲われた前日は夕刻より無数の蜉蝣が空を舞っていた。それを確かめる日が、いよいよやってきたのだ。

乙名は皆を前にして、大きく手を打った。

「よいか、刃向かわねば、盗賊とて命は奪われぬ。準備はしてきたが、もう一汗かいてくれ。奴らは汗をかきたがらぬゆえ、汗をかいた分だけ、奪われるものは必ず少のうなる」

皆の不安を打ち払い、心を鼓舞する乙名の声が村に響き渡った。

村人たちは、前の年に奪われたやぐらから米を下ろし、麻袋や木枘に小分けし始めた。米は基本四方のやぐらの上に分けてある。ただ、今年は新たに馬小屋の天井裏にも俵を置いた。あとは、米をいたる所に分け置き、盗賊に奪わせながらも、時と労力をかけさせ、わずかでも奪われる量を少なくする、それが乙名の策だ。

「戦う気概がないから、奪われるのじゃ」

佐吉は馬小屋を覗きながら吐き捨てるように言った。

乙名の指示で与助とともに前日に移動した米俵は、天井裏で藁に隠れていた。その下で若馬のアオがふっふっふと鼻をならし前足を上げていた。

「刃向かって殺されるよりましじゃ」

横にいた与助がすぐに言い返した。

いつもなら、そこから二人は言い争いとなるのだが、佐吉は珍しく何も言わなかった。そこへ乙名がやって来て、俵の積まれた荷車を指差した。

「そのの俵を水車小屋に運んだら休め。明日は早い」

俵は二俵、見慣れない編み方をしていた。

「種麦じゃ。沙汰人が融通してくれた」

米の後作として麦を植える村が増えていた。麦は年貢にも取られない。米が不作でも、麦を植えていれば、次の稲刈りまで食いつなげる。

「沙汰人が？」と佐吉が首をひねると、

「重い年貢の穴埋めのつもりじゃろ」と乙名が答えた。

「いずれにしてもありがたいことじゃ」

与助はそう言いながらも、米と麦の二作は佐吉が前々から言っていたこと、乙名が佐吉のために頼んだのではと考えていた。

「肥が足りぬ」

佐吉は荷車の前で、持ち手をつかみ、力を込めて押し下げた。

米の後作に麦を植えるなら、地はやせ、肝心の米の収量は落ちる。下肥だけでなく、油粕や魚粉が必要になる。それには銭がいるが、村に肥を買う銭などない。銭を借りて、不作となり、娘や子を売る村の話はよく聞く。

「油粕も沙汰人に頼んでおるゆえ、麦つくりを村人に教えてくれるか、佐吉」

「麦よりも、盗賊のほうが先だ」

佐吉は乙名を振り返ることなく、荷車を曳いた。与助も後を追いついて、俵を押しした。

水車小屋の前には小さな橋がかかっていた。二人は荷車を止め、俵を担いで橋を渡った。水車小屋のお婆が、搦いたばかりの米を升で掬い、甕に流し込んでいた。

「お婆、明日は山にでも入っておれ」

佐吉がお婆の後ろに麦の入った俵を下ろした。与助も横に俵を置いた。

「わしのことなど気にするな」

お婆の見つめる水路の先に、蜚螿が羽をゆつくりと開いては閉じ、空に昇っていた。

「蜚螿は子を残すために群れをなす。無数の死をもって命を守り継ぐ。それが蜚螿の生きる術なのだ。村の皆が生き残れるなら、わしは喜んで屍となる」

佐吉と与助も、川面から夕暮れの空に昇り始めた蜚螿を見ていた。

ゆらゆらと飛ぶ蜚螿には逃げる力も身を守る術もない。お婆の言う通り、鳥や魚に多数の命を奪われ、それでも残ったものが命を継ぐ。それが佐吉にはこの村の百姓に見えた。

「おれたちは蜚螿じゃない」

佐吉は背から鎌を手に取り、打ち払うように蜚螿を切りつけた。蜚螿は刃を振る風になびき、佐吉の鎌は空を切った。

与助は何も言わず、鎌を持つ佐吉の手首をつかんだ。

風に追いやられた蜚螿が一匹、お婆の髪に貼りついていていた。

「よいか佐吉、強いものが生き残るのではない。生きて命をつないだものが強いのだ」

お婆は蜚螿の薄い羽を指ではさむと、手のひらにのせ、そっと息をふきかけた。

「臆病者ほど刃を振り上げるが、人に向けた刃はやがて己に向かう。わしも若い頃、そのことを知っていれば、違った道を歩めたかもしれぬ。おぬしはおぬしの道を進め。だが、

生きて命をつなぐことは忘れるでない。それが救ってくれた乙名に報いる唯一の道だ」

お婆の手から、蜚蜚が再び弱々しく空に上がった。

その姿を見て、与助は握っていた佐吉の手を離した。

佐吉は何も言い返すことができなかった。盗賊に焼き討ちされた集落で、藁の中に埋もれ生き残っていた佐吉と与助を見つけ、この村で育ててくれたのが乙名だ。

お婆もそうだ。山にあったお婆の村は一揆を起こし、領主の兵に討たれた。生け捕られたお婆は兵士たちに凌辱され続けた。最後に笑いながら首を締め、腰を押しつけてきた男の小太刀をお婆は苦しきのあまり引き抜いた。それからのことをお婆は覚えていないと言うが、山の洞で小太刀を首に当て死のうとしていたお婆を止め、村に連れてきたのも乙名だ。それだけではない。乙名は多くの逃散ものや傷ついたものを村に受け入れてきた。

お婆は米を搗きながら、いつもの調子で口ずさみ始めた。

「一寸先は闇なれど

一寸虫にも五分魂

命を燃やし 世を照らせ

地に落ちて 肥となれ」

それは、お婆の村人たちが筵旗を立て唱えた歌だった。

佐吉と与助は押し黙ったまま空の荷車を曳き、馬小屋近くの壁一枚隔てだけのそれぞれの家に戻った。すでに陽は落ち、蜚蜚が次々と小川から立ち昇り始めていた。

二

佐吉は家に入り、体についた蜚蜚を土間で払い落した。月明りが差し込んだ家はがらんとしていた。嫁をもらうことで村人と合力して建てた家。賑やかになるはずの家だった。

「この女子と夫婦になれ」

前の年の田植えを控えた忙しいときに、乙名は二人の見知らぬ女子を連れてきて、佐吉と与助に祝言を上げさせた。乙名が連れてきたということは理由があるのだろう。佐吉も与助も何も聞かなかった。お互い何も知らぬまま、その日から佐吉とユイ、与助とマツは夫婦になった。

女子や家族など興味のなかった佐吉だが、ユイと一緒に暮らして、誰かの笑顔を見て生きることの幸せを初めて知った。百姓が生きるのに、楽しいことなどない。口元が緩むとしたら死ぬときだけだ。だからこそ、ユイの笑顔は佐吉の大事な宝となった。かまどの火を熾すユイ、繕いものをするユイ、佐吉が目をやると、首をかしげ微笑む。その顔を見るだけで、佐吉は生きていける気がした。

その笑顔が、稲刈りを前に突然奪われた。あれからちょうど一年になる。

その日も蜚螿がわき立ち、夜には空を白く覆っていた。

家の戸を開けたユイは、短い命を終え、落ちてくる蜚螿を見て、

「雪よ。雪が降っている」と、娘のようにはしゃいでいた。

「蜚螿など、じゃまなだけだ」

佐吉が取り合わないでいると、ユイは、

「稔り雪」と言っ、手を外に向けのぼしていた。

傷だらけで、ふだんは隠しがちなその小さな手を白い蜚螿が綿のように包んでいた。

「わたしの生まれた里では、雪は豊作の吉兆とされていたの」

里の話もしたことなかったユイは、手のひらを顔に近づけ、幸せそうに笑っていた。

その頃、盗賊は蜻蛉の群れに隠れ、村に近づいていた。

蜚螿が地に降り積もり、夜が明けると、盗賊の姿は露になった。知らせを受けた乙名は、
急ぎ子らを集め佐吉と与助に託した。乙名にとって、人も米と同じ、少しでも散らし隠す
こと、大事なものは遠くへ置くことで被害を減らす策だった。

佐吉と与助は、ユイとマツに家に隠れているように言い、子らを連れ山に分け入った。

そして、笹竹の藪に身を伏せ、盗賊たちの動きを見張った。

「なぜおらたちは隠れるのだ？」

村に来たばかりの三太が与助に尋ねた。

幼い妹とともに銅山で働かされていた三太は、妹を背負い足抜けし、追手に追われなが
ら走り続けた。水車小屋で倒れている二人をお婆が見つけたときには、妹は矢を背に受け
息絶えていた。妹を守ろうとした三太、身を挺し守ったのは妹のほうだった。

「この村は大事なものは分けて隠す。それが乙名の考えじゃ」

与助は三太を見ることなしに答えた。

「新入りのおらでも村には大事なのか？」と、三太はなおも与助に問うた。

「あたりまえだ。皆、命は大事じゃ。特に子は宝じゃ」

与助の答えに、三太は続けた。

「他の男たちが村に残るのに、与助と佐吉がこの役を任されるのは、乙名にとって二人が
若衆で一番大事ということか？」

三太の口は止まらなかった。

「いいから、黙っておれ」

二人の話に痺れを切らした佐吉は、三太の頭を押さえると、腰帯に差していた鎌を抜い
た。三太は鎌の刃を見て口を閉じた。

「佐吉、刃を抜くな。刃の照り返して盗賊に気づかれる」と与助に言われ、

「すまぬ」と佐吉はすぐに鎌を背に収めた。

「どうも、おれは餓鬼が苦手だ」

「そうじゃが、うちにも子ができたらしい」

「それはめでたい」

佐吉は目を細め、与助の肩に手を置いた。

「おぬしのところはまだなのか？」

「おれにはよくわからぬ」

佐吉が照れて口籠っていると、聞き覚えのある女の叫び声が村から聞こえてきた。

「人でなし」

「出て行っちゃだめ」

それはユイとマツの声だった。

襲ってきた盗賊たちは、乙名の策にはまり、米を盗むのに手間取っていた。そこに家に隠れているはずの二人の女房が頭領の馬の前に飛び出してきた。

佐吉と与助は鎌に手をかけ、竹藪に身を乗り出した。

馬上の頭領に向かい、ユイが何か口答えしていた。頭領は背中から三尺はあろう異国の剣を抜いていた。

ユイを守ろうとして、マツが近くにあった鎌を手を取った。それを見た他の盗賊が、頭領を守るように馬を前に出し太刀を振り下ろした。マツは身体をゆっくりと翻すように地面に倒れた。マツが倒れゆくのを呆然と見つめるユイを盗賊たちは轡をかませ、縄で荷車に括りつけた。連れ去られる荷車の上で、ユイは佐吉がいる山の方をただ見つめていた。

それは一瞬の出来事だった。乙名も村のものたちも何もできなかった。

佐吉と与助が山から駆けつけた時には、マツの息はすでに絶え、ユイの姿はなかった。

幼い頃から兄弟のように育った佐吉と与助。仲の良い友でもあった二人は嫁をもらい、小さいながらも家を建て、隣同士仲良く幸せに暮らしていくはずだった。しかし、同じ日に佐吉はユイを連れ去られ、与助はマツと生まれてくる子の二つの命を奪われた。

「死んでいれば諦めもつく」

女房を奪われた佐吉がからむように呟くと、

「生きているかもしれぬ。それだけでいいではないか」

女房を殺された与助も堪えることができず言い争いが繰り返された。

相手が憎いのではない。お互い顔を見ると、何もできなかった己の不甲斐なさを思い出すのだ。二人は同じ悲しみを深く抱いて日々を過ごしてきた。

あれから一年、盗賊は必ずまたやってくる。

佐吉はこの日をただひたすら待っていた。盗賊の後を追ひ、ユイの居場所を突き止める。ユイが生きている証などない。たとえ生きていたとしても、すでに売られているかもしれぬ。ましてや盗賊に見つかれば、佐吉の命など一溜まりもない。育てくれた乙名や村人も累が及ぶともかぎらない。それでも、佐吉の心は決まっていた。

もし生きているなら、あの笑みをもう一度見たい。そして、愛おしく思っていたこと、守ってやれず、すまなかつたことだけは伝えたい。

佐吉は壁にかけてあつた小袖に腕を通した。

ユイとマツは祝言の後、木綿の布を蓬で染め、身体に合わせて小袖を縫ってくれた。木綿は麻とは違い、肌当たりが柔らかい。与助は喜んで野良で着ていたが、佐吉は気恥ずかしくもあり、もつたいなくもあり、着た姿をユイに一度も見せることができなかつた。

佐吉は小袖の襟を両手で引き、帯をきつく締めると、鎌を手にとつた。刃は土埃で汚れていた。佐吉は桶の水を寄せ、砥石を取り出した。掬つた水を刃に垂らし鎌を砥いだ。

一方、板壁一枚隔てた隣の与助も眠れずにいた。佐吉の思いは痛いほどよくわかつていた。与助は菜種油に火を灯し、藁で草鞋を編み始めた。小袖を口で引きちぎり、切れ端で鼻緒をすげ、祈りを込め、藁一本一本を編み込んだ。

家の外では、無数の蜉蝣が月の光に向かい立ち上っていた。夜の闇が蜉蝣の白さに明るく煙っていた。

三

一番鳥の鳴き声を合図に、佐吉と与助は家を出た。

まだあたりは暗かつた。蜉蝣が地に無数の骸となつて降り積もっていた。

「子らを山に頼む」

乙名はすでに子らを集めていた。前の年にはいなかった若い娘と身重の女もいた。

「わかつた」

佐吉は細紐を咥え、小袖にたすきをかけた。

「良い小袖じゃのう」

乙名は佐吉の小袖に触れ、

「お婆が搗いた栃餅じゃ、持っていけ」と、包みを懐に押し込んだ。

佐吉は目を見開き乙名の顔を見た。懐に手を差し込むと、柔らかさと温もりがあつた。

栃の実は時期としてはまだ早い。灰汁を抜くにも時がかかる。お婆はいつ栃餅を搗いたというのか。

「女と子らは任せてくれ」

驚きで声も出せぬ佐吉に代わり、与助が乙名に答え、二人は山に向かった。

山の入口で、与助は鎌を手に蔓草と笹竹を払い、新たな道をつけた。

「おれが先を行く。おぬしはしんがりにつけ」

鎌がきつく締められた佐吉の帯に、与助は草鞋を差し込み、背を強く押した。

皆、知っていたのか。佐吉はちぎれた与助の小袖の右腕を見た。小袖は与助にとってもマツが作ってくれた大事なもの。

「すまない」

佐吉は頭を下げることにしかできなかった。

与助は子どもらと女を見渡し、両の手を顔の前で大きく打った。

「いいか、おれについて離れるな。ただ黙って前を向いて歩け」

「追手は山にも来るのか？」と、大人の声が変わった三太が与助に聞いた。

「盗賊に殺されなくなかったら、声を立てずに後ろを振り返るな。わかったか」

前の年、マツが斬られたのは皆見ていた。誰もが真剣な面持ちで与助の言葉に頷いた。

「追手が来たら、おらが囷になる。山を走らせたらおらの足に追いつくものはない」

三太は己の腿を叩き、手を広げると、ひよつとこの顔をして震える子たちを笑わせた。

三太は、そうすると笑う妹の顔が好きだった。

「では、行くぞ」

与助は三太と子どもを連れて、生い茂る草を鎌で打ち払い、山の奥に入って行った。

子らを先に行かせた佐吉は列の一番後ろについた。置いて行かれぬように斜面を登る子らは前しか見ていなかった。佐吉は一人列から離れ、山の中に消えた。

朝露が上がる頃、頭領らしき輩が背中から剣を抜き、襲撃の号令をかけた。

山を大きく回り込んだ佐吉は、村の入り口に現われた盗賊たちを背後から見ている。

振り上げられたのは両刃の異国の長剣。ユイを攫った盗賊たちに違いなかった。佐吉は盗賊が現れた道に向かって走り始めた。盗賊が村に現われた方向は峠への一本道。されど、相手は馬。村が襲われている間にわずかでも先回りせねば、根城までたどり着けない。

与助は女と子らに伏せるよう合図をし、山から様子をうかがった。

村には盗賊たちが雪崩込み、恐れを煽るように馬に鞭を入れ、蹄を高く上げた。土埃に混じり、蜉蝣の白い骸が宙に舞っていた。

「村の長よ、手間取らせるな。無駄な殺生をするつもりはない」

盗賊の頭領が馬上から声を上げた。

乙名はゆつくりと前に出て、物見やぐらの一つを指差した。前の年も米はやぐらにあつ

た。頭領は手綱を操りながら、高さのあるやぐらを見上げていた。盗賊も盗んだものを根城まで持ち帰らねばならぬ。たとえ多くを盗んでも、運ぶのに時を費やせば、夜道には山賊も追剥ぎも潜んでいる。奪い合いの世、盗賊といえども欲をかいては命取りとなる。

「水車小屋にも俵が」

手下の叫ぶ声に、頭領らは馬で水車小屋に向かったが、手前にかかる橋は狭く、盗賊の大きな荷車は通れなかった。人手でとなればやぐらと同じで時がかかる。しかも遠目にも俵の数はわずかしか見えぬ。盗賊たちは時を稼ぐ乙名の策にはまりつつあった。

「俵は麦種。米は年貢に取られる。麦を作って凌ぐつもりだ。奪われては生きていけぬ」盗賊たちに追いついた乙名は、頭領の前で地べたに額をすりつけた。盗賊といえども、先の話をするれば、狩場は必ず残すと考えての乙名の台詞だ。

「まことかどうか見せてもらう」

頭領は剣を背中に収め、馬を下りた。

「頭、こんなところで手間取っていては」

「水車のしくみを見るだけだ。手間をとらぬ。慌てることはない。米なら馬小屋だ」

乙名は馬小屋が早くも気づかれたことに驚き、顔を上げた。

頭領はすでに橋を渡っていた。

「斬りたければ、斬り捨てろ」

水車を前に、お婆が箆を肩から羽織り、地べたに座っていた。

頭領はお婆には目もくれず、水車と村の用水の流れを見ていた。水車の回る軋みと水の落ちる音だけが聞こえていた。

頭領は水車を一通り見てから、米を搗く臼に指を入れた。そこには佐吉に持たせる餅を作った片栗の白い粉が残っていた。

「餅でも搗いたのか？」と、頭領が呟くと、

「栃餅じゃ」と、お婆がぞんざいに答えた。

そのとき初めて、頭領はお婆の顔をじろりと見て、

「もしか、一揆でもするのか？」と聞いた。

「稲刈りを前に一揆などするわけがねえ」

お婆は箆を脱いで立ち上がった。

「おぬし、なぜ一揆の前に栃餅を食うことを知っている」

「山百姓の考えそうなことだからな」

頭領は笑いながらそう言うと、麦の俵を確かめもせず、橋を戻り馬に跨った。

「村の長よ、馬小屋の米はもらったぞ」

頭領は馬の向きを変え、鐘を蹴り馬小屋に向かった。盗賊たちは皆、後に続いた。

馬小屋は入口が狭く、人の数が入れない。屋根裏に上がるにも、狭い梯子が一本。梯子で俵を上げ下ろすには屈強な男手がいる。足場も悪く運び出すには夕刻まではかかる。乙名の勝ちだ。山から村の様子を伺っていた与助は、盗賊たちが馬小屋の前で騒いでいるのを見て確信した。山に消えた佐吉にも勝ってほしいと与助は願った。

一方、佐吉は山道をひた走っていた。

荒々しい走りに、草鞋はすぐにすり切れたが、与助にもらった草履は使わず裸足で走った。新しい草鞋はユイに履かせたかった。佐吉は裸足で山道を走り続けた。

日が陰り始めた頃、馬の蹄と荷車の音が近づいてきた。

「どけ、どけっ」

盗賊の一団が勢いをつけて駆け抜けた。

佐吉は身を隠す間もなく、盗賊たちに蹴散らされ、沢にころげ落ちた。荷馬車を曳いて走る一頭の馬が、沢に落ちていく佐吉を大きな瞳で見ている。

「アオ」と佐吉は小さく声を上げた。

その瞳はユイが攫われていくときと同じように何かを訴えていた。馬小屋の米が奪われたのだろう。しかし、馬小屋に置いたのは粃米、嵩の割に量は少ない。連れている娘や子もいなかった。アオだけですんだのだ。乙名の勝ちだと佐吉は思った。

佐吉は蔓を引き寄せ、道に這い上がった。米俵には密かに鎌を入れ、わずかながら粃が漏れるよう細工していた。盗賊の後には、こぼれ落ちた粃米がうっすらと地面に続いていた。佐吉は粃米を一粒拾い上げ噛み締めると、足元についた線を辿り山道を歩き続けた。

やがて陽は落ち、山犬の遠吠えが遠くに聞こえていた。朝になり陽が昇れば、山鳥が粃をついばむ。夜のうちに追いつかねばならぬ。佐吉は下だけを見つめ歩いた。しかし、いつのまにか目印の粃米は消えていた。山の一本道、馬と荷車が入れるような脇道はない。

一里ほど歩き続けても、道に粃米はもう一粒も落ちてはいなかった。

「やはり先ほどの所か」

粃を見失った場所に急ぎ引き返そうとすると、突然、岩陰から獣の皮を着た男が跳ねるように現れ、声をかけてきた。

「どこから来た。怪しきものが、これ以上進むではない」

闇で顔はつきりと見えぬが、声の低さから若くはないと思われた。

「山の麓からだ。おぬしこそ盗賊の仲間か？」

佐吉は後ずさりしながら答えた。

「おれたちは山の民。生きるために獣の命をいただくことはあっても、己の欲のために、徒党を組んで盗みや人殺しなどせぬ」

男の語気は荒かった。しかし、矢を背にはしているものの、太刀は帯刀していない。佐吉の心にある怖れが盗賊と思ひ違いをさせたのだ。

「すまぬ。村を襲った盗賊を追い、途中で見失ったもので」

佐吉は正直に話をした。

「ならば、一里ほど麓に戻れ。道から沢に入れば辿り着く」

その言葉が、佐吉にとって、どれほどありがたいものであったか。

礼をしたと思つた佐吉は懐のふくらみに気づいた。佐吉は道脇の笹をちぎると、栃餅を一つ葉にくるみ、黙って男に手渡した。

山の男は匂いをかいただけで、「栃餅か」と呟くと、佐吉を見て、

「あいつらはただの盗賊ではない。用心することだ」

そう言つて、岩に飛び乗り、夜空に向かい指笛を一吹きした。

夜の空には満天の星が輝いていた。星が一筋の光となり流れていくのが見えた。同じ空をユイが生きて見ていてくれるなら、それだけでいいのかもしれない。そんな気にさせる美しく大きな天空だった。

空から目を戻すと、すでに男は煙のごとく山の闇に消えていた。

急いで戻らねばならぬと思つたが、佐吉も疲れていた。包みから栃餅を一つ手に取り、口に入れてみた。うまかった。涙が出るほど、うまかった。

「皆が無事に生きていきますように」

毎年、正月に宮で手を合わせ、皆で栃餅を口にした。栃餅は米のないときの代用でもあり、ハレの食でもあった。佐吉と与助は栃餅が好物で、乙名は病の時も特別に栃餅を食べさせてくれた。佐吉と与助は栃餅が食いたくて病のふりをしたこともあった。嘘とわかっていても、乙名は無理をして栃餅を作ってくれた。親兄弟を殺された子を喜ばすものは、村にはそれぐらいしかなかった。祝言の後も、佐吉とユイ、与助とマツ、そして乙名の五人で栃餅を食べ、皆が無事に生きていけるようにと祈つた。

栃餅の味を村に伝えたのはお婆だ。お婆の作る栃餅は、灰汁の抜き方が独特で苦味が残っているのに味わいがあった。ユイに会えたら、この栃餅だけは食べさせてやりたい、もし会えるなら、それだけでよいと佐吉は思い、包みを閉じ、懐に押し入れた。

佐吉は襟を整え、帯を締め直し、固まった膝を曲げ伸ばすと、腿を両手で打ち、糲が途絶えた場所へとひた走つた。

あたりはすでに白み始めていた。心を落ち着かせ、今一度あたりをじっくりと見渡すと、草が不自然になびいている箇所があった。草で作られた衝立が、沢に下りる道を見えないように覆っていた。近くには草で覆い隠された荷馬車もあったが、そこに米俵はなかった。米俵を人手で運ぶとなると、根城はそう遠くない。佐吉は草をかき分け、沢に下りた。

沢には川が流れ、川底には、馬が渡りやすいように、平らな石が置かれていた。水の中の石のくぼみに、黄金色の粃米の粒が光って見えた。川の流れが、佐吉の火照った足を冷やしていた。佐吉は両手で水を口に含むと、一気に川を渡った。馬が通れる小道があったが、佐吉はそちらには進まず、木の根と蔓につかまり、目の前の沢を這い上った。一刻も早く辿り着きたかった。

佐吉は腕に渾身の力をこめて自からの体を押し上げた。

四

見たことのない白の世界が広がっていた。一面、白い玉が宙に浮かび、はじけていた。見とれる佐吉の首根を何者かが強く押さえつけた。

「伏せる。見つかる」

地面の横には、獣の皮を着た山の男がいた。

「あの洞窟が奴らの根城だ」

山の男が指差した先には、岩崖が聳え立っていた。崖には大きな裂け目があり、脇には槍を持つ足軽が二人、見張りとして立っていた。

そこへ野の端から籠を背にした白装束の女たちが現れた。

「綿摘みの女たちだ」

「綿とは？」と、佐吉が問うと、

「綿の実だ。おまえの着ている小袖の綿だ」

山の男は地面を這い、目の前に広がる白い玉をひとつかみして戻ってきた。

綿の実を受け取った佐吉の手に刺すような痛みが走った。

「殻の先で手を傷つけやすいので気をつける。洞窟内は綿織り場になっている。手摘みに綿織り、細かな手作業ゆえ、女が集められ働かされている」

綿布は貴重だ。ユイは何処から綿布を手に入れ小袖を縫ったのか、佐吉は尋ねることもなかった。

「皆、攫われてくるのか？」

「いや、多くは生きるために売られた、帰る里もない女たちだ。今は摘み取りだが、綿の仕事はとにかく細かく、つらい。夜は男たちの相手もある」

そう話しながらも、山の男は、女たちの後ろから馬でついてくる野武士を見ていた。

女たちは洞窟に列をなし入って行った。最後に、一番後ろにいた女が、首にかけた白い布で汗を拭い、空を眩しそうに見上げていた。女の襟足には大きな黒子があった。

「ユイ」と、佐吉は思わず声を漏らした。

女は襟元を押さえ、走って洞窟の中へと消えた。見張りは声の方角に槍を身構えた。馬をつないだ野武士も太刀を抜いていた。

女を追おうとする佐吉の腕を男が押さえた。

「見張りと野武士の計三人、おれが引きつける。その隙に行け。賊はいないようだが、時はない。戻ってきたら袋の鼠だ」

「申し訳ない」

「礼などいらぬ。子どもの頃、けがをして死にかけたことがあるが、そのとき救ってくれたのが山の百姓だ。恩を返したくて探しているが、村はもうない。おまえのくれた栃餅が、その村で食べた味に似ていた」

山の男は、伏せたまま野の端を横に走ると、指笛を吹き鳴らし、見張りに向け矢を放った。見張りの二人は矢を避けると、槍を持ち指笛の鳴る方に走り出した。野武士も太刀を抜いたまま野を横に走った。

佐吉は綿の実に隠れるように腰を落とし、畑を横切り岩の切れ目から洞窟に入った。

中は暗く湿っていた。足元は滑りやすく、天井には多くの蝙蝠がはりついていた。しばらく歩くと、洞窟の中で急に天が開けた。その場だけ上の崖が割れ、空が見えていた。それはまさに洞窟の中に開けた天然の要塞だった。

眩しさにかざした手の先には、おびただしい数の甲冑や刀、宝物があった。開いた箱から銅銭らしきものもあふれ出ていた。

左手奥には米俵が積まれ、あたりには濁酒の甘い香りが漂い、大きな樽があちこちに転がっていた。綿の種も絞っているのか、油の匂う甕も並んでいた。酒も油も盗んだものではなく、そこで造られたものと見えた。

右手には、綿が大量に積まれ、その横で白い着物姿の女たちが働いていた。綿から種を取り出すもの、綿を紡ぐもの、糸を繕るもの、多くの女たちが分かれて作業に精を出していた。その中に佐吉を見ている女がいた。

「どうして？」と漏らした声は、やはりユイだった。

佐吉がユイの名を呼ぼうとしたまさにそのとき、洞穴を通り馬のいななきが聞こえてきた。ユイは酒のある場に走り、横になっていた大きな樽を起こした。考えていることは佐吉にもわかった。逃げる場も時もなかった。佐吉はユイの起こした酒樽に身を隠した。

「何があっても出ないで」と、ユイは樽の木蓋を上からかぶせた。

盗賊たちは頭領を先頭に、蠟燭の灯りを持ち、列をなして戻ってきた。

「山の獣が一匹潜り込まなかったか？」

頭領らしき男が、見張りから渡された矢を手に、首を大きくひねり見渡した。

「何やら匂う」

土のついた酒樽が不自然に立つのを見て、頭領はにやりと笑った。

「ここはいつも油と酒の匂いでむせかえるほどだわ」

ユイは何とかその場を取り繕おうとしていた。

樽の中で佐吉は、背に差した鎌の柄を握り、じっと聞き耳を立てていた。

「そうか、おれには饅えた下肥の百姓の匂いがするが」

頭領の声に、佐吉は思わず小袖の匂いを嗅いだ。同時に樽の中の濁酒の香りを深く吸い込んだ。匂いで酔いが回った佐吉の荒い息と震えが樽を動かしていた。

「一生隠れているのか、臆病者め」

頭領は樽に向かって、背中から長尺の剣を抜いていた。

幼い頃、盗賊が怖くて与助とともに、馬小屋の藁に隠れた。与助が出ようと促したときも佐吉は首を振った。漏らした小便を見られるのが恥ずかしかった。その間に、村人も家族も皆殺しにされていた。ユイの時も、死ぬ気であれば、山からでも大声を上げ盗賊を止めることはできた。それもこれも己の臆病さからだ。

「臆病者なんかじゃねえ」

気づけば、佐吉は蓋をはね上げ、樽から飛び出していた。

鎌を振り上げ、走り出そうとしている佐吉の動きを見て、頭領は剣を中段に構えた。そのままでは、佐吉は剣の串刺しとなる。ユイは咄嗟に両手を広げ頭領の前に飛び出した。

真っ直ぐに向かう佐吉の体は何ものかに当たり、勢いが止まった。柔らかさと暖かさの中で、女たちの叫び声が聞こえていた。

目の前でユイの肩に鎌が刺さり、白い着物が血で赤く染まっていた。佐吉は驚きのあまり、鎌を持つ手を離れた。鎌はゆっくりと地に落ちた。

「あんた」

ユイは佐吉の耳元でささやくと、肩口を押さえ、その場に座り込んだ。

酔いは冷めた。弱い臆病者ほど刃を振り上げる。人に刃を向ければ、やがて己に刃が向かう。お婆の言葉が佐吉の胸に突き刺さった。

「そうか、ユイが逃げ込んだ村の男か。心配するな、鎌で人は死なぬ」

頭領は鎌を拾い、佐吉の喉元に突きつけた。

「いいか、百姓の道具は、みな刃が内向きで浅く、戦うためには作られていない。人に深手を負わせるには、刃を外に向け、稲を刈るように一気に切り抜くしかない」

頭領は鎌を逆手に持ち、佐吉の首を切り上げるまねをしてから放り投げた。

「臆病者のくせに、盗賊から女を奪いにくるなんて、いい度胸だ」

「取り返しに來ただけだ」

佐吉の言葉を聞き、頭領はその目を大きく見開き、洞窟中に響き渡る声で大笑いした。

「呆れるほど愚かなやつだ。ここから逃げたユイとマツを先に奪ったのはおまえらの方だ」
そう言い放つ頭領をユイは傷口を押さえ睨みつけていた。それを見て頭領は言った。

「おまえが、からくりを口にしなければ、マツも死なずにすんだものを」

「からくりとは何だ」と、佐吉は頭領から守るようにユイの前に身を乗り出した。

確かにあのとき、山からでは聞くことはできなかったが、頭領とマツは何か揉めていた。

「冥途の土産に教えてやる。あいつを見ろ」

頭領が目を向けた先には、顔に刀傷のある男が立っていた。それは年貢の検分で顔を合
わせたばかりの沙汰人だった。

「領主と百姓の間で年貢を抜き、検分と言って村を偵察し、取りこぼしまで盗賊に襲わせ
る。奪った米は酒に変え、銭のない百姓にまで売りつける。行き詰った集落には、銭貸し
を紹介し、女子どもを形にとり、綿を紡がせる。沙汰人など隠れ蓑で、人でなしさ」

「種麦も同じことか？」

「その通り、米の後に麦を植えさせ、肥なしには育たぬ土としてから、綿を搾った油粕を
売るのだから、まさに鬼の所業だ」

頭領は再び剣を握っていた。

「この女はそれを非道過ぎる、人でなしと言ったが、その非道の片棒をかついでいたのは
おまえらも同じ。おまえの小袖だって、ここから持ち去った綿布だろう。皆、巡り巡って
同じ穴の貉。それが人というものだ」

佐吉は己の小袖を見た。世は知らぬところで大きな黒い龍に飲み込まれている。非道す
ぎるからくりだった。

「強いものが弱いものを餌にする。それは非道ではなく、命あるものの道理。餌になりた
くなければ、何をしても強くなるしかない。俺とて、命がけで戦い抜いてきた」と、沙汰
人が口をはさんできた。

「おぬしの顔の傷も名誉の負傷か？」

頭領が皮肉まじりに言うのと、沙汰人は弱く愚かな男と女を目の前に気でも緩んだのか、
それまで口にしたことない身上を漏らした。

「この傷は、山向こうの一揆を制圧し、手籠めにした女に小太刀でやられたもの。女は追
い詰められると、何をするかわからぬ。ことに山百姓の女は猿のごとき手強いものだ」

沙汰人は薄笑いを浮かべていたが、それを聞く頭領の目から笑いは消えていた。

二人の話聞き、もはやどう足掻こうと勝てる相手ではない、と佐吉は悟った。

「わかった。しばしの時をくれ」

佐吉は膝をつくと、懐から包みと草履を取り出し、地面に広げた。

「お婆が搦いてくれた」

佐吉が差し出した枳餅をユイは静かに噛み締めた。佐吉は与助の作った草鞋をユイに履かせた。ユイの足には少し大きすぎた。

「枳餅を食らい、新しい草履で三途の川でも渡るといふのか」

頭領は長尺の剣の切っ先を二人に向けた。

剣を見て、体を寄せ合う二人に、

「臆病者、おれにも一つ食わせろ」

頭領はそう言うと、剣先を枳餅に刺し、身を屈めるように口元を寄せ齧りついた。

「うむ、この味は」

灰汁の苦味の残るその独特な枳餅の味に、頭領は思わず目を閉じた。

その瞬間、ユイは佐吉を押しやり、草刈り鎌を手に取ると、逆手に握り返し、頭領の前に飛び出した。

鎌の刃を外に向け振り抜いたユイの前で、頭領は枳餅を口にしたまま、首から胸元に赤黒い血を流していた。ユイは後ずさり、鎌を持つ手を離した。

頭領は首元を押さええ目を見開くと、傷口から息が漏れる声でゆっくりと唱え始めた。

「一寸先は闇なれど

一寸虫にも五分魂

命を燃やせ 世を照らせ

地に落ちて 肥となれ」

頭領は血を流しながら笑っていた。

「幼いおれは、枳餅が最後の飯とも知らず喜んで食っていた。皆がもう戻って来ぬとは知らずに」

頭領は息の漏れた声で誰に語るでもなく、長尺の剣を両手で大きく振り上げ、佐吉とユイに向かい、足を大きく踏み出した。佐吉はユイを強く抱き寄せた。

「おれは臆病者が大嫌いだ」

頭領はそう叫ぶと、踏み出した足を後ろに引き、突然ぐるりと後ろに身を翻した。

「天誅だ。この鬼畜生！」

頭領は喉が破れるような叫び声を上げ、後ろにいた沙汰人に剣を振り下ろした。

「何故だ？」

胸に受けた斬り口を押さえ、沙汰人は太刀を握り返した。

「貴様が制圧に加わっていたのは、おれのおっ父とおっ母の村の一揆だ」

頭領は喉から血を流し、剣を杖に肩で息をしていた。

傷を押さえた手で古傷に触れた沙汰人の顔は赤い血に染まっていた。

二人の姿を見て、今度は佐吉が飛び出した。佐吉は、立ち竦む手下から蠟燭の火を奪う

と、積み重ねていた綿に火を放った。乾いた綿はじりじりと音を立て、炎を立ち上がらせた。「何をする」と、太刀を振り上げた沙汰人に、佐吉は近くの油甕を蹴り倒した。油は飛び散り、そこに綿の火が走った。沙汰人は太刀を持ったまま火だるまになり暴れ、その背後から、頭領がもう一度切りつけ、二人はともに倒れた。

甕から流れ出た油に火の粉が移り、洞窟は瞬く間に炎に包まれた。統率を失った手下どもは、欲にかられ、盗んだ財宝や銅銭を我先に持ち去ろうと争いを始めた。

綿織り場にいた女たちは、火と煙の中でただ泣き叫ぶばかりだった。

「皆を逃がしてあげて。一人でも多く助け、命をつなぐ。乙名なら、きっとそうするはず」
ユイはそう言って、自分は火の中に身を投げようとしていた。

佐吉はユイの手を強くつかむと、

「乙名なら、どんなことあっても生きろと言うはず。それに、おれも大事なものは必ず守ると決めた」と言い、その手を頬に寄せた。

「あんた」と呟くユイの顔が歪んでいた。

佐吉は、ユイの手を握ったまま、

「急げ、洞窟を抜け逃げるのだ」と、大声で泣き叫ぶ女たちに洞窟の出口を指差した。

「水車小屋の女に」

足元から息の漏れる声が聞こえた。

「枳餅はうまかったと伝えてくれ」

血だらけで倒れる盗賊の頭領は、そう言ってこと切れた。

「おぬしも臆病者の百姓だったのだな」

佐吉は見開いた目を手で閉じると、ユイとともに炎と煙の中、女たちを追って入口に向かった。狂ったように鳴きながらばたつく蝙蝠と競い、女たちは暗い洞窟を互いに手を取り走った。

入口の前に、女たちをかき分け先に出た佐吉だったが、追い払わなければならぬ見張りも野武士もすでおらず、山には指笛がこだましていた。

洞窟からは、女たちが倒れ込むように次々と出て来た。皆、腰を曲げ、煙にやられた喉を手で押さえ、大きく肩で息をしていた。その手は皆、ユイと同じ綿摘みで傷ついた手をしていた。

佐吉は両手を顔の前で大きく打ち、女たちの目を引きつけた。

「いいか、力の限り逃げよ」

佐吉は目の前にある綿玉をちぎり取り、

「生きて、どこかで種をまき、花を咲かせるのだ。さあ行け」

女たちはうなずくと、それぞれが綿玉を握り、蜘蛛の子を散らすように白い綿畑の中に

飛び散って行った。

洞窟から溢れ出る煙に、繋がれた馬たちが激しく嘶いていた。立派な鞍をつけたアオが首を振り、大きな目で佐吉とユイを見ていた。

そばに行くと、アオはふっ、ふっ、と鼻息を荒くした。

佐吉は繋いでいた縄をはずすと、鐙に足をかけ、アオの背に跨った。そして、ユイに手を差し出した。その手をつかんだユイは、佐吉の後ろにつき、腰に手を回した。

「行け、アオ」

佐吉は手綱を波打たせ、鐙を強く踏んだ。アオは上体を前のめりにすると、前足を高く上げ、綿玉の揺れる畑へ駆け出した。

火の海となった洞窟では、熱せられた甕の油が次々に割れ、火柱を高く上げていた。炎は出口を求め洞窟内をひた走り、財宝や銅銭箱を抱え抜け出ようとしていた盗賊たちを一気に飲み込み、外へ吹き出した。

アオが川を越え、山道を駆け上がったとき、背後で地を揺るがす爆音が鳴り響いた。山の鳥が一斉に羽ばたき、獣たちが雄叫びを上げた。

振り返ると、洞窟の岩崖は崩れ落ち、土煙を上げていた。

追ってくる盗賊の姿はなかった。

「生きているか？」

佐吉が問うと、ユイは背中であなづいた。

生きてさえいれば、皆、許してくれる気がした。

「村に帰るか？」

佐吉がもう一度尋ねると、ユイは腰に回していた手を開いて見せた。その傷だらけの小さな手には、真白な綿玉が握られていた。

「わたしも種をまき、小袖をつくる」

耳元で囁くユイが佐吉の背に頬を強くすりつけた。

手綱を整える佐吉の手に、白いものがゆらゆらと落ちていた。見上げると、吹き上げられた綿毛が空一面に舞っていた。

「雪よ、雪が降っている」

後ろからユイの声が聞こえた。顔は見えなくても、ユイが笑っているのはわかった。

アオの鼻はすでに村を向いていた。

「稔り雪か」

佐吉はそう言うと、まっすぐ前を見て、アオの手綱を強く引いた。